6．大学での起業教育・実践教育にかかる取組

①地域や社会と連携した実践教育
～フィールドワークを活用したプロジェクト型演習～



大阪商業大学　フィールドワークゼミナール推進員会委員長
高橋　美貴

1．はじめに

大阪商業大学では、建学の理念のもと、それを具現化する教育目標のひとつとして「実学教育」を掲げ、たとえば、起業家精神の育成を目指したOBP コース（大阪商業大学ビジネスパイオニアコース）を設けるなど、様々な機会を設けて、学びの意欲の高い学生を育てる施策を実施してきた。また、起業教育・起業家育成プログラムの一環として、高校との連携や地域との連携・産学連携を図るための事業展開をしてきた。

本学のフィールドワークゼミナール（以下 FW ゼミナールとする）は、演習科目（ゼミナール）における教育に学外での活動を積極的に取り入れ、大学で学ぶ「知識」とフィールドでの様々な課題への取組という「実践」を有機的に組合せ、「社会的問題解決能力の育成」を目指すものである。

本稿では、本学における FW ゼミナールの取組の概要を紹介する[1)]。

2．FW ゼミナールの歩み

起業家育成プログラムを実践する中で、一部の教員は、演習を中心とする授業で、学生の主体的学びの姿勢を引き出し、社会に出て活躍できる能力を伸ばそうという試みが開始されていた。その試みは、机上の学習だけでは学生の「気づき」や「主体的学びの意欲」を引き出すことに結び付きにくいという問題意識にもとづいている。つまり、講義やテキストで学んだことが「社会に出てどのように生かされるのか」あるいは「社会にはどのような問題が

1）本学の FW ゼミナール活動の取組の詳細は、以下の資料に詳しい。
・「実践教育による社会的問題解決能力の養成～フィールドワークを活用したプロジェクト型演習の導入～」大阪商業大学 教育 GP 推進プロジェクト、平成 23 年 3 月
・「フィールドワークゼミナール活動報告書（自己点検）」大阪商業大学　フィールドワークゼミナール推進委員会、平成 24 年 3 月、平成 25 年 3 月

あり、それを解決するために今学んでいることがどう役立つのか」などが学生には伝わりにくいという点である。もちろん、多くの授業では、社会における現実の問題を意識した教育指導がなされているが、学生の問題意識の低さや、社会に出て活躍するには「どのような能力を身につけておかなければならないか」を理解していないことによる自覚の無さといったものが阻害要因となって教育効果につながってはいないのではないかということである。

そこで、前述のようにいくつかの演習では、実践の場に学生を置き、その中で現実社会の問題に関わる機会を提供することで「直接的に」学生の学びへの気づきを喚起し、社会に出て活躍できる能力・素養を身につけさそうという取組がなされるようになってきた。例えば平成17年から始められた「瓢箪山地域活性化事業」では、本学学生が近隣地域にある「スマイル瓢箪山（商店街連合組織）」および東大阪市・大阪府と協力し、商店街活性化のためのイベントの実施などを行ってきた。そこでの教育手法は、単にフィールドに出て調査などを行い、現状を見るだけで終わるのではなく、地域の組織や団体（クライアント）から解決すべき現実の問題や課題を提示してもらい、あるいは、教員や学生自らが問題を発見し、テーマを定め「学生・クライアントによるプロジェクトとして問題・課題の解決にあたる」というものである。こうした先駆的な取組が、本学の取組の母体となっている。

本学のFWゼミナールは、全学的取組として本格的にスタートした平成20年度から本年度で6年を経たことになる。当初の3年間は、文部科学省「質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）」として採択された取組として、フィールドワーク活動の推進とともに、様々な環境整備や制度の整備、あるいは、教育手法の開発や学生の能力評価指標の開発、プログラム全体を評価する仕組みの開発などを行ってきた。その後、平成23年度からは、一般のゼミナールと同等の枠組みの中で活動を続けてきている。また、同年、全学的取組である「就業力育成支援プロジェクト」が開始された。これは、それまで多くの取組が、主として意欲ある学生を対象としたものであったのに対し、全ての学生を対象とした取組で、FWゼミナール運営の中で培ってきた能力評価や自己評価のノウハウが生かされている。

3．本学のフィールドワーク型演習の特徴

本学のFWゼミナールの1つの特徴は「プロジェクト型演習」という点である。つまり、各ゼミナールは地域の団体や組織（クライアント）から解決すべき課題を提示してもらい、あるいはクライアントの抱える課題を発見し、それらの解決に向けた取組を「プロジェクト」として、クライアントと協力しながら実施していくところが特徴となっている。また、もう1つの特徴は「長期的・継続的」に実施していくところにある。学生は最長3年間にわたり1つのプロジェクトにかかわることになる（図1）。このように長期にかかわることにより、自分の取組む課題についてより深く理解し、授業で学んだ知識をどのように活用していけばよいかを具体的な活動を通して学ぶ

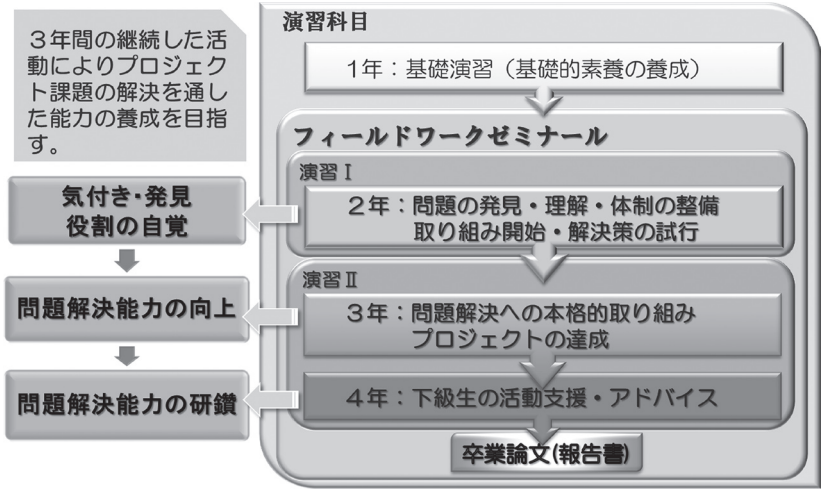


図1　FWゼミナール3年間の流れ

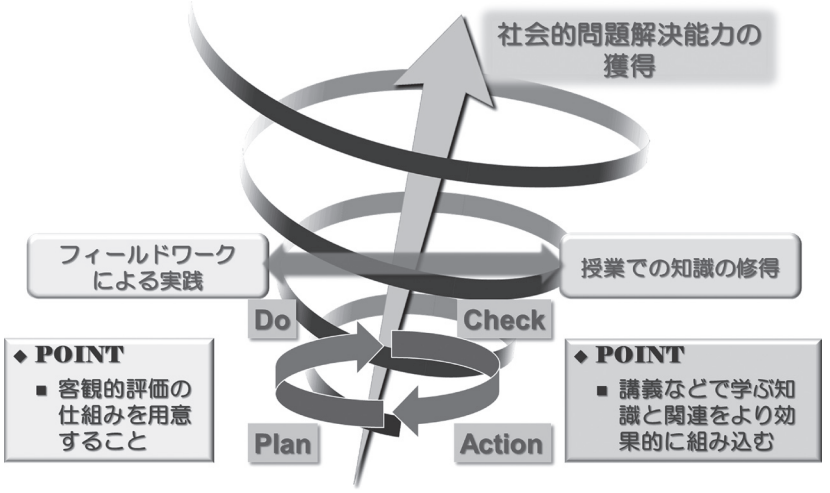


図2　講義と実践の相乗効果

ことになる。また、その過程で成果の確認と評価、課題解決方法の見直しや改善を行い、次の年の取組に生かすという、いわゆるPDCAサイクルを実践していくことになる（図２）。

４．取組の目的

FWゼミナールにおける教育目標は「社会的問題解決能力」の獲得と向上にある。学生は、現実の社会（フィールド）に出て、そこに存在する問題・課題を発見、理解し、さらに課題の解決に向けて行動する中でさまざまな経験をすることになる。こうした実践を通した経験と授業での学習を有機的に組み合わせることで、社会に存在するさまざまな問題を教科書的な理解だけで終わるのではなく、実社会で必要となる課題解決のための総合的能力を身につけさせることが大きな目標である。つまり、図３に示したように、教室内の学習だけでは獲得することが困難な様々な能力～想像力や判断力、行動力、コミュニケーション能力、協調性など～を実践を通して獲得、向上させていくことを期待したものである。

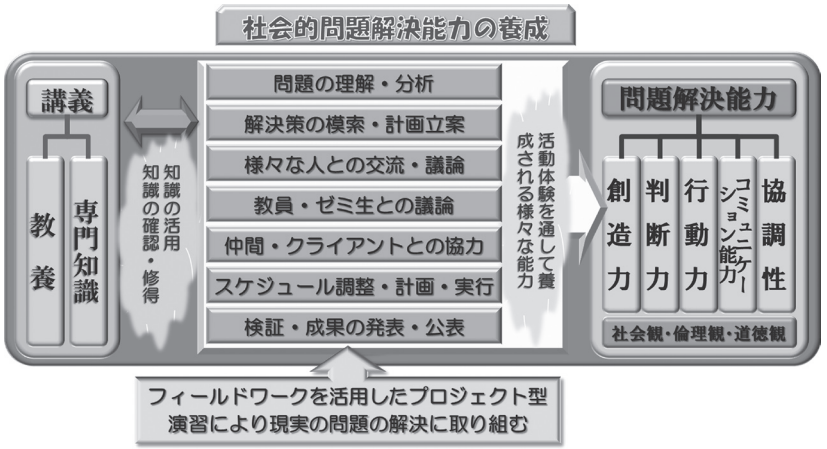


図３　取組の目的

５．組織と運用

フィールドワーク活動を長期にわたって安定的に実施するためには単独の教員の力では大きな無理がある。我々は、教育GP採択を契機としてFWゼミナール運用・支援の組織を整備した。その概要を図４に示す。運営全体を統括する委員会のもとに、FWゼミナール担当教員を主とする活動支援・能力評価・プロジェクトという３つのワーキングを設置し、それぞれが役割分担することで教員の負担を軽減するようにしている。それぞれのワーキングの役割分担を表１にまとめてある。

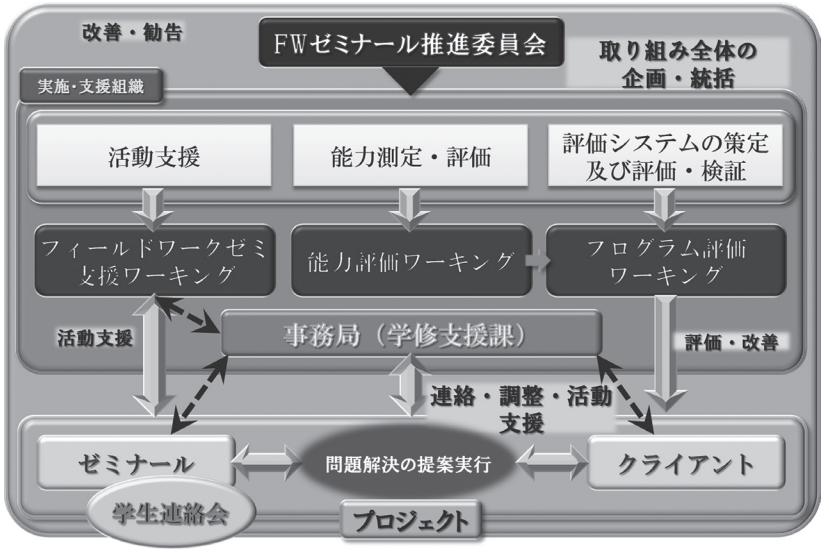


図４　組織と運営

組織体制	機　能	構成員
フィールドワークゼミナール推進委員会		
プログラム評価ワーキング	評価システムの策定と評価・検証	本学教職員
能力評価ワーキング	能力評価システムの策定・評価の実施	本学教職員
フィールドワークゼミナール支援ワーキング	活動支援・成果報告会の企画運営	本学教職員
事務局	プログラム実施上の事務全般	本学職員（学修支援課）

表１　運営組織の役割

６．年間スケジュールと主なイベント

FWゼミナール共通の年間スケジュールの概要を図５に示す。４月には活動計画を立て、各プロジェクトの実施に移る。最後にそれらの取組の振り返りとしてプロジェクト評価報告書をまとめる。また成果報告の場として、中間報告会と成果報告会を開催している。この間、能力指標を測定する調査を実施し、それにもとづく個別面談も実施している。そして、毎年度の終わり

に自己評価も兼ねた活動報告書を委員会としてまとめ、公表している。このように、学生自身も担当教員も、PDCA サイクルを確実に実施する「仕組み」を整備している。



図５　FW ゼミナールの年間スケジュールと主なイベント

７．実施状況と活動例

表２にフィールドワークで取組んできているプロジェクトをまとめた。担当教員の専門分野あるいはそれに関係する内容であることはもちろん、それぞれの学科の教育目的に即したプロジェクトになっており、単に学外での活動を行うことだけが目的とならないよう専門教育との関係を意識した取組となっている。

また、取組事例の一部を表３にまとめた。この例に見るように単にイベントの企画・実施だけではなく、事前の学習や調査など、大学での「学び」との関連を意識した取組になっていることがわかるであろう。実は、教育 GP に採択された最初の年は、学外での活動に力を入れるあまり、活動過多になってしまい、理論と実践の有機的な連携をひとつの目的としていたにもかかわらず、学習面がおろそかになってしまったという反省があった。その反省にもとづき、２年目からは「理論と実践」のバランスを意識した活動に変更していった結果である。

FW ゼミナールテーマ一覧

学科	ゼミテーマ	プロジェクト	クライアント	開始年度
経済	フィールドワークによる地方鉄道活性化の研究	昼間時・休日の利用者増を目指した水間鉄道活性化プロジェクト	水間鉄道株式会社	H22
経営	フィールドワークによる中小企業の起業家精神の研究	中小企業の抱える問題（自社製品開発）に取り組む	フィールドコア平野	H20
		東大阪の高速道路高架下の有効活用	（株）アドバンス	H22
		中小企業へのインターンシップ	大阪同友会	H25
商学	フィールドワーク地域活性化プロジェクト	地域業者、小学校と連携して行う瓢箪山地域活性化	一般社団法人 瓢箪山地域まちづくり協議会	H20
商学	フィールドワークによるホテル・旅館と地域の連携	京都（市）観光と宿泊の現状、並びにマーケティングの提案	京都府旅館ホテル生活衛生協同組合	H24
公共経営	少子高齢化と地域福祉 ～フィールドワークで現状をリサーチする～	ボランティア・市民活動の広報活性化 買い物弱者救済プロジェクトなど	東大阪社会福祉協議会 ボランティア・市民活動センター他	H22
公共経営	起業家精神を身につけるインターンシップ型ゼミ	インターンシップを通じて社会的問題解決に寄与する（住環境教育向け教材・教諭法の開発と実施・引きこもりの子供たちおよびその両親への支援・住環境教育向け教材・教諭法の開発と実施・中小企業 PR 雑誌の作成と PR 会の開催など）	NPO 法人 JAE に登録している社会的企業や大阪ボランティア協会の紹介による社会的企業 NPO 法人 Deep People	H21
公共経営	フィールドワークを通じた観光地域づくり	四条畷市における地域観光振興プロジェクト	四条畷市 観光ボランティア団体「なわてロードガイドゆずりは」	H21
		近鉄「駅長おすすめフリーハイキング」の共同実施を通じた地域観光振興プロジェクト	近畿日本鉄道 （八戸ノ里駅）	H24

表２　フィールドワークゼミテーマ一覧（これまでの実績～ 25 年度）

活　動　例

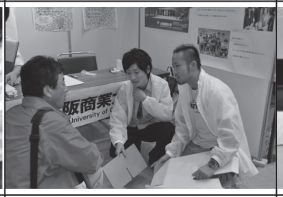

河川環境保全活動


地域観光振興
～ハイキングイベントの企画・実施～



シルバー人材センターと協力して大学祭に出店


知的障がい者のための


新商品開発と提案


新商品開発

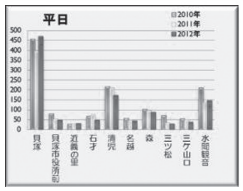
運動会の企画実施		～ビジネスアイディア甲子園に応募～
		
地方鉄道の流動調査・アンケート調査	地方鉄道の流動調査結果の分析	ゼミ内での企画コンペ
		
勉強会・グループワーク	関係者へのインタビュー調査	外部講師を招いての勉強会

表３　FW ゼミナールの活動例

８．取組の評価

このような取組においては、ともすれば企画やイベントの実施などに注目が行き、結果として「イベントが成功したか」ということや、そのことにより「学生やクライアントが満足した」とか「達成感などが得られた」ことなどを取組の成果・評価としてしまいがちである。実践を通して得られる経験や知見ももちろん重要な成果である。しかし、我々の取組の本来の目的は、社会に出て必要とされる「能力」の養成であったはずである。我々は、このようなことも踏まえ、取組を評価する仕組みを整えた。評価の視点は、次の３点である。

１）プロジェクト評価：プロジェクトが課題解決に向けて着実に実施されているか

２）教育効果評価：学生の能力の向上が見られるか、教育効果が上がっているか

３）社会的インパクト評価：我々の取組、活動が社会に広く認知され、評価されているか

我々は、これらについて、学生自身による自己評価に加えて、クライアントや教員による評価などの定性的評価はもちろんのこと、可能な限り定量的評価を実施している。その結果の一例を示す。図６に示したグラフは、２年生の最初と比較して、３年生の終わりでの能力指標値がどの程度伸びたかという「成長度」を一般ゼミナール生と FW ゼミナール生で比較したものである。いずれの指標においても FW ゼミナール生の伸びが大きいことが分かる。

また、次のグラフ（図７）は、クライアントによる活動開始時（４月）の評価と、活動の終わり（11 月）での評価を比べたものである。ここでもすべて項目において評価が上昇していることが示されている。

ここに示したように、我々の想定した「問題解決能力」の向上にフィールドワーク活動が教育の手法として非常に有効であることが示されている。

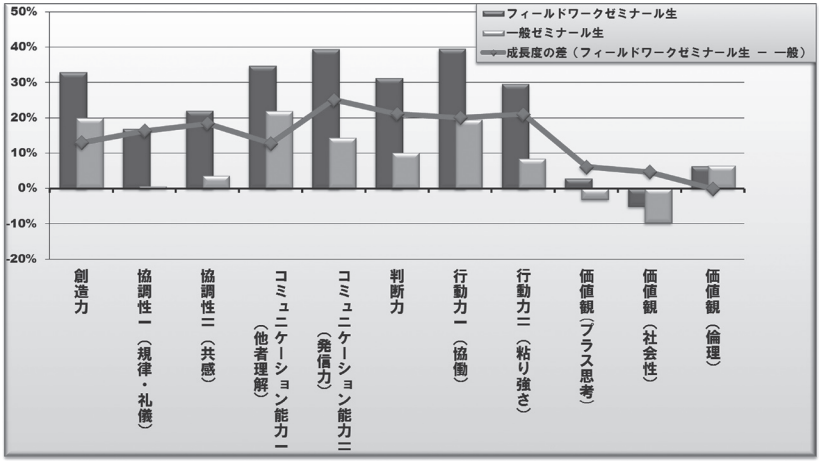


図６　能力指標の変化の比較（FW ゼミ生：一般ゼミ生）

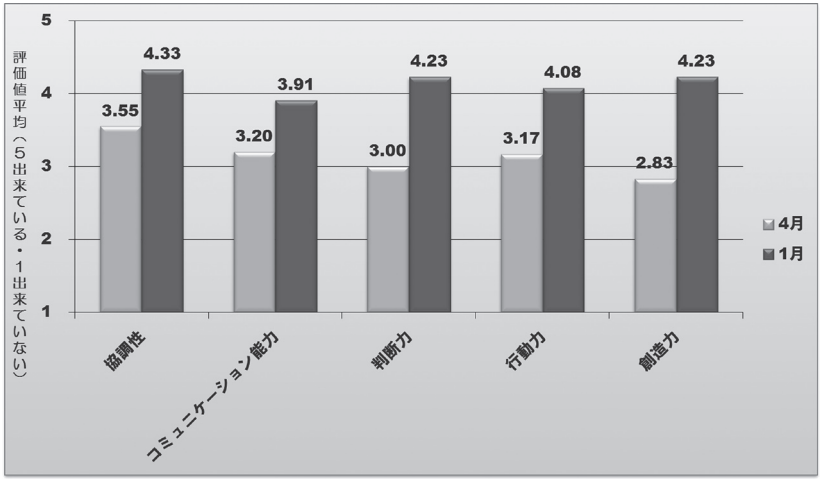


図７　クライアントによる学生の能力評価

８．教育理念の実現とフィールドワーク

本学は、「世に役立つ人物の養成」を建学の理念とし、それを支える４つの柱として「思いやりと礼節」、「基礎的実学」、「柔軟な思考力」、「楽しい生き方」を掲げている。学外に出て地域の住民、企業等と協力して課題の解決にあたるという本学の「プロジェクト型演習」は、まさに、この４つの柱の目指す教育を実践しているものと言える。

年齢や地位の異なる人との協力は「思いやりと礼節」の心を養い、他者の意見を聞き自身の考えを振り返り新たな発想を得る「柔軟な思考力」を身につけ、他者と共に力を合わせ協力する中で「楽しい生き方」を実践し、課題解決にあたっては大学での学びを活かし「基礎的実学」を体得するなど、教室の中だけでは身につけることのできない様々な素養を身につけ「世に役立つ人物」として社会に送り出すことのできる取組であると言える。

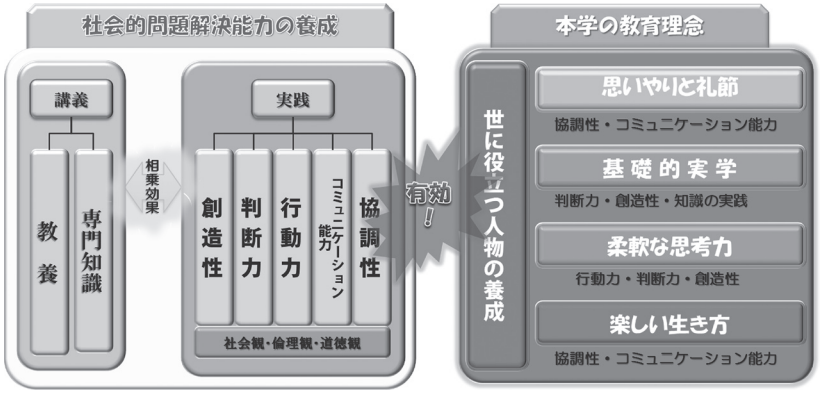


図８　建学の理念と FW ゼミナール活動

９．おわりに　～今後の課題～

本学のフィールドワークの取組も、本格的に開始してから今年度で６年を迎えた。この間の取組により教育効果に関しても、地域への貢献と言う面でも大きな成果を上げてきたと考えている。一方、学生や担当教員の負担が大きいという問題を抱えている。活動時間や地域に関して一定の制限を設けるなど制度面での改革や教員の指導により過度な負担にならないように配慮はしているが、まだまだ、十分ではないというのが実情である。フィールドワークのような、ある種「特別な取組」は、往々にして特定の熱意ある教員に依存してしまう側面がある。特に本学の「プロジェクト型」演習では特定のクライアントとの信頼関係を土台とした活動であり、本学の都合だけで安易に別の教員に変更したり、プロジェクトを取りやめるということが非常に難しい。さらに、地域社会にその取組が認められるほど、新たな課題の提案がありさらに負担が増えるというジレンマも生じている。しかしながら、このような問題を徐々にでも解決しながら、持続可能な態勢を整え、組織として推進・支援していくかが重要であると考える。

昨今、学生の主体的学びを喚起する教育として「アクティブラーニング」が注目を浴び、その必要性が広く認められるようになってきている。このような情勢を考えると、我々のような取組の重要性、必要性はますます高まってくるものと考える。今後、我々はこの取組の中で得た運営や評価手法などのノウハウなどを共有し、活かしていくことが求められよう。

最後に、

この取組は、教員、学生はもとより、地域の方々の協力なくしては成り立たないものである。ここに、クライアントとして協力してくださった多くの皆様に感謝申し上げたい。